

# 悔しい気持ちに向き合う

～4歳児の始めたラグビー～

◆企画：佐藤寛子(附属幼稚園)

実践：佐々木麻美・佐藤寛子(附属幼稚園)

## ◆はじめに

4歳児2学期、大勢の友達と過ごす楽しさや充実感を味わいつつも、友達との思いの違いに戸惑ったり、出来ることと出来ないこととの間で悩んだり、葛藤の多い時である。そんな時に、子どもたちがラグビーを始めた。本物のラグビーに憧れつつも、子どもたちがルールを考え、創りだしていったオリジナルの遊びである。教師も共に関わり、3学期も連日楽しんだ。子どもたちは、ラグビーの遊びの中で、力を出し切る気持ちよさ、友達と四つに組んで関わる親近感、ルールを自分たちで創り出していく面白さを味わっている。本論考では、子どもたちが始めたラグビーの遊びを紹介しつつ、A児の事例を中心に考察することで、遊びの中で育まれるコンピテンシーについて探究してみることとする。

## ◆活動・遊びの紹介

### \*ラグビーの始まり

園庭高台（通称：おやま）で、たまたま見つけたボールを2人の園児が取り合う遊びを始めたことがきっかけだった。じゃれあうようにボールを取り合う中で、どちらかが、「これってラグビーじゃない？」とそばにいた教師に言ってきたのだ。「ほんと、ラグビーみたい」と応え、そこから、「ラグビーやろうよ！」と周りの子どもたちを誘って始まった。もちろん、みんながラグビーを知っている訳ではない。保護者が好きで、実際に見たことがある人、テレビで試合を観戦したことがある人など、イメージのある人がいる一方で、「ラグビー」という響きは聞いたことがあるけれど、全く知らない人も多い。それでも、子どもたちは、遊びの中で、ボールを、蹴っても、持って走っても良い、この遊びが好きになり、楽しむようになっていった。

### \*ビブスの魅力

子どもたちの遊ぶ様子を支えたいと思い、教師も遊びに参加。さらに、遊びが盛り上がっていくことを願って、2色のビブスを用意した。ビブスに興味を持って遊びに加わる子どもたちも多い。子どもたちの中には、勝っているチームのメンバーになりたくて、すぐにチーム替えができるようにと、2色のビブスを重ね着する人や、ただただ着るのが楽しくて何枚も重ねて着ては、身動きが取れなくなる人もいて、そんなことがあると、可笑しくてみんなで大笑いする。



2色のビブス

### \*ルールは子どもたちがつくる

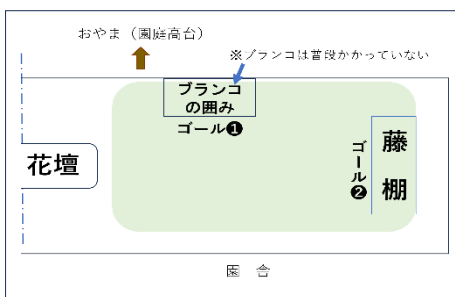


図1 子どもたちが遊ぶラグビー場

「知っている」という子どもたちも、それほど詳しくラグビーのルールを知っている訳ではないところが、この遊びを長続きさせた要因かもしれない。最初から、子どもたちに任せて遊び始めたところ、チーム分けも、自分の好きな色のビブスを着ることで決まり、チームの人数に偏りがあってもかまわない。ゴールの位置も、大人が考える位置関係とは全く異なる(図1)。子どもたちの感覚はとても興味深い。

ボールの取り合いが激しくなると、「たしか、ラグビーってスクラムがあったよね」などと、教師が投げかける。すると、「そうだ、そうだ」

と頷き、それからは、子どもたちの誰かや教師が、いよいよというタイミングで、「スクラム！」と叫ぶようになった。声がかかると、みんなでスクラム（ほぼ円陣）を組む。肩を組んで、なんだかほんわかした雰囲気になり、誰かがクスッと笑うと、みんなも笑う。なんともものんびりした、このスクラムのおかげで、白熱しすぎてぶつかり合いが起きそうな空気が和らぐ。緩急があることが、この遊びをさらに面白くする。



円陣スクラム

## ◆事例と考察

このラグビーに関わってきたA児のある日の出来事を振り返ることで、遊びに見られる子どもたちの育ちについて、コンピテンシー育成の観点から考察を試みることにする。

### 「くやしい気持ち」（4歳児）

2023年12月

連日続いているラグビーに、この日、A児は自分から加わった。それまでも、時折この遊びに参加することはあったが、周りの迫力に気後れし、いつの間にか抜けてしまうことが多かった。ところが、この日は、こぼれたボールを取ろうとしている。私がパスをすると、しっかり受け取り、ゴールに向かって走った。A児の周りにボールを取り返そうと相手チームのメンバーが集まる。あっという間に、ボールを奪われ、体の大きな年長児にトライを決められてしまった。「うゑ〜ん」A児の泣き声が響く。「くやしかったね、大丈夫、次は決めよう！」とA児を支える。ところが、その後数回、ボールを抱えるものの、あっという間に年長児に取られ、何本もトライを決められ、そのたびに、A児は大声をあげて泣いた。

ボールを抱えたA児に、「向こうからまわるといいよ」と相手チームのいない方向を伝えるが、なぜかA児は、そちらを選ばずに、まっすぐに相手チームにつっこんでいく。そのたびにボールを奪われ大泣きするのだ。「うん、くやしい、くやしいねえ」そう言いながら、私は、A児の涙を拭いた。

帰りの時間が近づいてきた頃、A児がゴール間際で、ボールをつかまえた。最後のチャンスだ。A児の周りに、相手チームの子どもたちが集まってきて団子状になる。このまま、私が押し込めばトライできるかもしれないと力をこめる。が、ふと、違うかもしれないと、力を抜いた。その途端、年長児がまたボールを取って、あっけなくトライを決めてしまった。「ぎゃあ〜ん」ひときわ大きな声でA児が泣いた。

「明日もやろうな！」と声をかけてきた年長児に、目に涙をためたまま、A児は何も言わない。「何を食べたら、あんなにトライが決められるの？」と私が聞くと、「肉だな！」と年長児。「肉なら食べてるよ…」と小さい声でA児がつぶやいた。

周りの子どもたちが帰り支度を進める中、「今日は、これ、着たまま帰る！」と、その日、A児は、ビブスを脱がずに家に帰った。

### 【考察】

友達からボールをパスされても、すぐに手放していたA児が、この日は、自分からこの遊びに関わり、ボールを離さずに、ゴールに向かって走って行く。なんとかトライが決められたら、どんなに嬉しいだろう、きっとA児の自信につながっていくはずだと、私も必死に応援した。けれど、わざわざ相手チームに突っ込んでいっては、上手いかずに大泣きすることを繰り返すA児の姿を見ていたら、彼は、私に助けられてトライを決めたいわけではない、自分の力でなんとかしようとしているのだと思い始めた。最後にトライが決められたらおそらく満面の笑みで気持ちよく帰れたことだろうが、現実はそのほど甘くはない。大声で泣くA児の悔しさを私も感じて一緒に悔しがらなければならなかった。悔しさを抱えたまま、降園となったが、ビブスを着たまま帰る姿からは、諦めない気持ちが伝わってきた。



連日、誘い合ってラグビーを楽しむ

## ◆おわりに コンピテンシー育成の観点より

4歳児が始めたこのラグビーの遊びには、友達と関わる楽しさを感じ始めた子どもたちが、どうしたら楽しくなるかと、それぞれに考え、遊びながらルールを創っていった過程がある。創造的思考力、問題解決力といったコンピテンシーに関わる力を、子どもたちは遊びの中で随所に発揮し、友達と協働しながら、この遊びに夢中になった。

A児の事例からは、友達との間で起こった上手いできないもどかしさ、自身の中での出来ることと出来ないこととの狭間での葛藤が伝わってくる。自ら「やってみよう」と心を動かし始めたA児を支えたいと関わる教師も、どう支えたら本児の力になるのだろうかや気持ちが揺らぐ。コンピテンシーでいうところの対人葛藤解決力は、こうした上手いできないもどかしさや戸惑い、葛藤を充分に感じ、体験することが必要であろう。けれど、その葛藤を自分一人で解決し、乗り越えていくことは困難である。幼稚園は、関わりの中で子どもも大人も育ち合っていく場である。A児の悔しい気持ちを受けとめ、悔しさをそのまま共に味わうこともまた、教師の関わりの大仕事の一つであろう。そうすることが、葛藤を乗り越えていく術（すべ）を、A児自身が考え、見つけていくことにつながっていくのではないかと考える。